

所 陵

No. 71

[SENRYO/KANSAI UNIVERSITY MUSEUM REPORT]



三彩刻花芍薬文双耳壺

● 目 次 ●

沖縄県立博物館・美術館の「沖縄戦 一失われた文化財」展示・・・	長谷 洋一	2
大正癸丑蘭亭会 100 周年記念展覧会余滴 一王羲之から喜田華堂へ一	中谷 伸生	4
祭場に転換される住まい 一宮崎県椎葉村の神楽一	森 隆男	6
「矢原繁長展 一直観一」……封印を解くために	矢原 繁長	10
「平野町ぐるみ博物館について」	青木 真兵・古川 桂	12
かんさい・大学ミュージアムネットワーク連携展「大学の扉を開く」	石立弥生子	14

関西大学博物館

〒 564-8680 大阪府吹田市山手町 3 丁目 3 番 35 号

Tel. 06-6368-1171 (直通) Fax. 06-6388-9928

<http://www.kansai-u.ac.jp/Museum/>

沖縄県立博物館・美術館の 「沖縄戦一失われた文化財」展示

長谷洋一

今年は戦後70年にあたり、各地の博物館や資料館では戦争や戦時下での市民生活に関わる展覧会が数多く開催され、出征兵士を見送る人びとの姿や空襲の被害を伝える写真をはじめ、軍隊手帳や軍服、軍靴、戦時中の衣服や防空頭巾、軍事郵便、慰問袋など様々な資料が展示されている。戦争や戦時下の暮らしを取り上げた展示は、博物館での常設展示(通史展示)のコーナーとして取りあげるところもあり、また自治体による「平和資料館」や厚生労働省が設立した「昭和館」や「しょうけい館(戦傷病者史料館)」など戦中・戦後直後の生活に特化した博物館・資料館も設立されている。

先の戦争で失われたのは、多くの尊い人命や日常生活であることは言うまでもないが、物言わぬ文化財もまた戦争の被害を大きく受けていたことも無視できないことがらである。

文化庁からは1983年に『戦災等による焼失文化財 建造物篇』・『戦災等による焼失文化財 美術工芸篇』が、2003年にも『戦災等による焼失文化財 20世紀の文化財過去帳』が刊行されたが、各地の博物館や資料館で戦災による文化財被害を展示しようとする動きは少ない。そうしたなか、沖縄県立博物館・美術館の常設展示でそのことを伝える興味深い展示が行われているのでここに紹介したい。

沖縄県立博物館・美術館は、2007年11月に那覇市おもろまちに開館した。同館の概要については、既に本紙56号で米田文孝教授が紹介されているが、博物館常設展示室(総合展示)の一角に「沖縄戦一失われた文化財」の展示コーナーがある。(写真1)

1945年3月から始まった「鉄の暴風」とよばれた沖縄戦によって破壊された首里教会や焦土と化した那覇の町を撮影した大型写真パネルを背景にして、旧一品権現梵鐘・首里城正殿前の大龍柱・内間御殿「致知」扁額・首里城歓会門石獅子・崇元寺下馬碑(西)・旧波上宮朝鮮鐘龍頭・旧天竜精舎梵鐘の各資料が、被災を受け

たそのままの状態で見られる。いずれの資料も琉球王朝の文化と歴史を語るに欠かせない資料群であるが、お世辞にも「展示」とは言い難く、無造作に置かれているといえる。

首里城正殿前の大龍柱や崇元寺下馬碑(西)は無残にも折られて横たわり、その横では一部が欠けた歓会門石獅子がごろがっている。旧一品権現梵鐘は銃撃を受けた穴が残り、胴(草の間)には大きな傷がみられる。龍頭も失われ、乳や下部(駒の爪)の一部も欠損している。

旧波上宮朝鮮鐘は成化3年(1467)に朝鮮から琉球にもたらされたものだが、沖縄戦で梵鐘本体は失われ、残った龍頭のみが置かれている。

コーナー右側手前にある旧天竜精舎梵鐘は比較的損傷が軽いようにみえるが、乳の一部が欠け、切れ込みやへこみが随所に残っている。旧天竜精舎梵鐘は浦添にあったとされる天竜寺の梵鐘で、既に18世紀初めには天竜寺は廃寺となっており、梵鐘は首里の天王寺、安国寺に移された後、1944年に金属供出の対象となった。損傷は金属供出後に出来たものである。戦後になって梵鐘が鳥取県青谷町(現鳥取市)の弥勒寺に現存していることがわかり1962年に沖縄県へ返還されている。

被災した状態の展示資料や一見無造作にも見える展示手法からは、沖縄戦による文化財破壊の凄まじさや戦時下での金属供出の様相が伝わってくるのだが、内間御殿の「致知」扁額は沖縄戦終結後の文化財被害をも明らかにしている。



写真1 「沖縄戦一失われた文化財」展示コーナー



写真2 左から旧一品権現梵鐘、首里城正殿龍柱、崇元寺下馬碑、旧波上宮朝鮮鐘龍頭、「致知」扁額

「致和」扁額は、第二尚氏の開祖である尚円王が即位前に居住した西原町の内間御殿正門に掲げられていた扁額で、乾隆3年（1738）に第13代国王尚敬王による揮毫である。沖縄戦終結後アメリカ軍に接收され、その際に扁額を便器として利用するために右側に大きな穴が開けられている。（写真2）

よくみると、展示資料はレプリカではなく、すべて実物資料（一次資料）である。そのことに気付く時、よりいっそう沖縄戦やアメリカ軍による文化財の深刻な破壊・毀損の状況が、展示資料を通して痛切に理解できる。

戦争や戦時下での生活に関わる展示は、戦争の実態や当時の人びとの暮らしに焦点をあてるのが展示の常套手法と思いがちな筆者にとって、沖縄県立博物館・美術館の「沖縄戦—失われた文化財」展示コーナーはかなり意外な印象を受けた。このほかにも「忍び寄る戦争」「沖縄戦の住民被害」の展示コーナーもあるが、日本で唯一戦場となった沖縄での戦争展示としてはいささか隔靴搔痒の感が否めないこともない。そうしたなかで「失われた文化財」展示コーナーは逆に観る者に強い印象を与える。

こうした展示は、沖縄県立博物館が歴史や文化、自然を含んだ総合博物館であり、各分野のバランスや歴史分野に関しても先史時代から現代までを扱うため限られたスペースで展示しなければならない事情に加え、沖縄戦の実態に特化した施設として既に沖縄県平和祈念資料館、ひめゆり平和祈念資料館があり、同じコンセプトで展示するよりも文化財の破壊・焼失などを通して戦争被害を伝える方針を採用したことに

よるとされる¹⁾。

ただ戦争によって破壊・毀損を受けた文化財をそのままの状態で展示することに戸惑いを感じる向きもあろう。一般的には破壊・毀損された文化財は修復や復元を通して出来る限り製作された当初の姿にもどし、当時の歴史や文化を語る資料として扱われるが、そこには文化財が受けた戦争被害の痕跡は残らない。戦災による文化財被害を展示することの難しさでもある。

沖縄県立博物館・美術館の前身でもある沖縄県立博物館（那覇市首里大中町に所在した）では、1995年6月に太平洋戦争・沖縄戦終結50周年事業として「甦る沖縄・戦災文化財と戦後生活資料展」が開催され、沖縄県内外のみならずアメリカにも流出した文化財を一堂に紹介している。こうした長年の学芸員活動の蓄積と英断があったからこそその常設展示企画といえる。

沖縄戦によって喪失・毀損した琉球・沖縄の文化財は本土に比べて桁違いに多い。世界文化遺産となった首里城正殿や園比屋武御嶽石門、玉陵などは琉球政府時代からの努力が実り復元されたが、まだまだ戦争の爪痕を残す戦災文化財が数多く残されたままとなっている。金武町観音寺所蔵の旧天界禅寺梵鐘（沖縄県指定有形文化財）は胴部に砲弾を受けた大きな穴が開いたままであり、琉球漆器や紅型などの工芸品は、作品の喪失はもとより生み出した技術伝承そのものが絶たれている。

現在、「琉球王国文化遺産集積再興事業」として戦争によって失われた琉球王国時代から継承されてきた有形・無形の文化遺産を学術的知見や科学分析などを通して資料がもつ情報を集め、その上で当時の技術でもって復元を行う事業が進められている。戦後70年を経て沖縄の戦災文化財の復興はこれからまさに始まろうとしている。

写真掲載にあたりましては、沖縄県立博物館・美術館より御高配を賜りました。あつく御礼申し上げます。

1) 岸本弘人「博物館の戦争展示」沖縄県立博物館『学芸員コラム』048 <http://www.museums.pref.okinawa.jp/museum/column/column048/index.html>

大正癸丑蘭亭会100周年記念展覧会余滴

—王羲之から喜田華堂へ—

中 谷 伸 生

2013年の春、書聖と称賛された中国の王羲之(321—379)をめぐる展覧会が、関西大学博物館と図書館で開催された。書を中心に絵画、書簡、写真など珍しい資料を展覧して、京都で開かれた「大正癸丑蘭亭会」の100周年を記念する企画として内外の注目を集めた。その際に、事情があって展覧会目録の掲載から洩れた幕末期の絵画《桃花曲水図》(喜田華堂作)をここで紹介する。

王羲之が、永和9年(西暦353)3月3日に、現在の浙江省紹興市の南に位置する蘭亭において、41人の文士を集めて曲水流觴の宴を開いたことはあまりにも有名である。その宴は、3月最初の巳の日に水辺で禊を行う儀式であった。このときに、後に曲水流觴と呼ばれることになる一種の競技のような優雅な催しが行われた。つまり、王羲之を中心に集まった文士たちが、川に觴(盃)を流し、その觴が目の前を流れ過ぎていくまでに、詩を詠むことができなければ、罰として酒を飲まねばならない、という風流な宴である。やがてこの宴は、日本や中国においては蘭亭会として大きな広がりをもつことになる。そのときに作られた詩集の冒頭に、王羲之によって一気呵成に墨書された「蘭亭序」が記された。ここに記された墨書は、書の最高傑作として、日本や中国で繰り返し書き写されることになる。以降、蘭亭会を催すことは、東アジア諸国の書家や文人にとって、60年に1度の年、すなわち癸丑年の慶事となった。

この蘭亭会の文化的伝統は、今から丁度100年前の大正2年(1913)に、28人の首唱者によって開催された京都の蘭亭会に引き継がれた。首唱者の中には、京都帝国大学で東洋史を講じた内藤湖南や、泊園書院の主宰者で関西大学とも深い関わりのある漢学者の藤沢南岳、美濃出身の書家の山本竟山、また、肥前出身の文人画家の江上瓊山、さらに、文人画家として高名な富岡鉄斎らがいた。要するに、岡崎の京都府立図書館で開催された京都蘭亭会の会合は、東ア

ジアの漢字文化圏において、書と学術を一体化した異色の盛典であった。

また、中国側では、近代の中国画家を代表する呉昌碩が初代社長を務めた杭州の西泠印社が中心となって、日本側に呼応するように集会を開いた。当時、上海で暮らしていた中国学者の長尾雨山が、そこに参加し、蘭亭の曲水で汲んだ水をビール瓶1ダースに入れて、句の筍と一緒にわざわざ京都に送り届けたのである。水や筍は神前に供えられ、参会者は詩を詠んで献じたという。その意味では、京都と杭州の蘭亭会は、日中の文化交流を基盤とする国際性豊かな集会だったといえてよい。さまざまな人物の交流と親睦にあたっては、西泠印社の社員であった羅振玉らの中国の名士たちも参加した。

ところで、こうした王羲之の宴は、「蘭亭脩禊図」(「蘭亭曲水図」、「蘭亭図」など)として絵画化され、数百年にわたって、日中双方で描き続けられることになり、明代の仇英をはじめとする多くの中国人画家たち、そして、江戸時代に活動した池大雅や浦上春琴らの日本の画家たちの絵画を生み出すことになる。関西大学で開催された大阪蘭亭会の展覧会「大正癸丑蘭亭会100周年記念—近代日本における翰墨の盛典—」には、伝仇英の筆になる「蘭亭脩禊図」の絵画が出品された。この画卷は、100年前の京都蘭亭会で展覧されたもので、長らく秘蔵されていた作品である。展覧会の担当者が、京都の旧家を訪れ、この絵画を探し出したときの驚きと喜びは、筆舌に尽くしがたいものであったにちがいない。伝仇英の絵画が、実に100年ぶりに陽の目を見ることになったのである。

一つのエピソードを付け加えておくと、このときの展覧会に出品されたにもかかわらず、事情があって目録に掲載できなかった喜田華堂の《桃花曲水図》〔図1〕が、関西大学東西学術研究所に所蔵されている。「蘭亭曲水図」を多少とも変化させた絵画である。画面右上に「壬戌春日写 華堂」の墨書と「天隨(カ)」〔図2〕



〔図1〕 喜田華堂《桃花曲水図》

の白文長方印が見られることから、幕末の文久2年（1862）61歳の円熟期の制作で、縦20.1×横37.2cmの小品である。華堂の画面では、觴（盃）が流れる川のそばで、楽しげに歓談する王羲之と文士たちの姿を見てとることができるが、いわゆる大作の蘭亭図とは異なって、4名の文士たちが、桃の花が咲く河岸に集まって曲水流觴の宴を行うという親密な図様となっている。画面では酒を飲む文士をはじめ、変化に富む人物が描かれた。中央に座って盃を持つ人物は、王羲之を指すのかも知れないが、頭の被り物など、特にその特徴はない。文士の姿は、軽快で切れ味の良い線描でまとめられ、改めて華堂の力量の高さを窺い知ることができよう。

華堂は、享和2年（1802）美濃国不破郡今須（岐阜県関ヶ原町）に生まれ、明治12年（1879）2月7日に没。享年68歳。名は景静、字は伯寿、別号に竹石居、半舟翁などである。京に出て写生派の岸駒、岸岱に師事して絵画を学び、嘉永元年（1848年）頃、広井水車町（名古屋市）で絵師として居を構え、作画の評判が高くなり、尾張藩に招かれて藩御用絵師となった。名古屋における岸派の祖となって、岸派を根付かせた。代表作に《富貴祝寿之図》（一宮市博物館）などがある。華堂は20年間にわたり東国を遊歴して名勝を写生し、各地の文人墨客と交わった。清廉風雅な生活を愛し、門人も多かったというが、華堂に子はなく、門人の弟子たちもやがて岸派の誇る写生画から離れ、時代の趨勢に合わせて文人画家へと転じていった者が多い。

華堂が基盤を形成した尾張の岸派は、結局、



〔図2〕 款記・印章

大きな画壇へと発展しなかったため、華堂自身の名前も半ば忘れられることになるが、その写生による絵画が、幕末明治の岸派の中で、ささやかではあっても、手ごたえのある閃光を放ったことを見逃してはならない。

華堂筆《桃花曲水図》は、小品ではあるが、王羲之の『蘭亭序』の精神を変貌させながらも、幕末明治の文脈で新たな視点によって曲水の宴を絵画化しており、華堂の業績とともに、東アジアにおける王羲之の偉大さを証明するものとなっている。ただし、『蘭亭序』の末尾の悲観的な文章、すなわち「人間の生命は尽きることを約束されている。悲しいことだ」という言葉は、王羲之自身によるものではなく、後代に付け加えられたものだという祁小春氏の説もあるが、その主張も含めて『蘭亭序』の重要性を理解する必要がある。その観点からいって、華堂筆《桃花曲水図》は、『蘭亭序』についての独自の解釈となっており、東アジアにおける王羲之への思慕と『蘭亭序』への憧れの広がりを証明する佳品である。

博物館運営委員 文学部教授

祭場に転換される住まい

—宮崎県椎葉村の神楽—

森 隆 男

はじめに

宮崎県椎葉村では20数か所の集落に神楽が伝承されており、毎年12月に「冬祭り」と称して奉納されてきた。しかし椎葉神楽の存在が知られるようになったのは、昭和39年に民俗芸能の研究者である本田安次が当地で聞き書きをしてからである。その後、昭和56年からの4年間で本格的な調査が実施されて、学術的な価値が明らかになった。

日本民家集落博物館に移築されている椎葉の民家で、平成18年に大河内神楽が演じられ、以後、利根川神楽や尾前神楽の公演がそれぞれの保存会のメンバーによって行われた。現在、地元では公民館等が会場に充てられているが、本来は民家（神楽宿）で行なわれた芸能である。

私の関心は、神楽の鑑賞はもちろんであるが、半世紀ぶりに民家が祭場になる公演で、日常生活の場が祭場に転換するときの動きを確認することにあった。盆や正月に来訪する祖先神や歳神、頭屋儀礼における氏神などを住まいに迎えて祀る事例は多いが、それらは日常生活を送る家族と来訪神が同居する形態である。それに対

し椎葉の神楽宿は、数日前に家族が住まいを明け渡し、住まい全体を神聖な祭場に転換する事例である。

椎葉家の概要と神楽当日のしつらえ

昭和34年（1959）に椎葉村高尾から移築された旧椎葉彦蔵家住宅は、江戸時代末期の建築といわれ、古態を残していることから国の重要文化財に指定されている。椎葉家はかつて神楽宿を交代でつとめた旧家であり、山の斜面を造成した奥行き狭い敷地に建てられていた。そのため図のように山村住居特有の並列型の間取りをもち、山側はすべて板壁になる。母屋の前の庭も狭い。コザは仏壇と床の間が設けられた客間で、コザノシタハラは隠居部屋として使用された。デイは主人夫婦の寝室であるが床の間がつくられ、神聖な部屋と意識されている。とくに下肥を扱った日や月経中の女性の立ち入りが禁止されていた。ウチネは家族が食事や団欒の時間を過ごす部屋である。ガイドコは調理場で、食材や食器の水を切るため一部が簀子になっている。

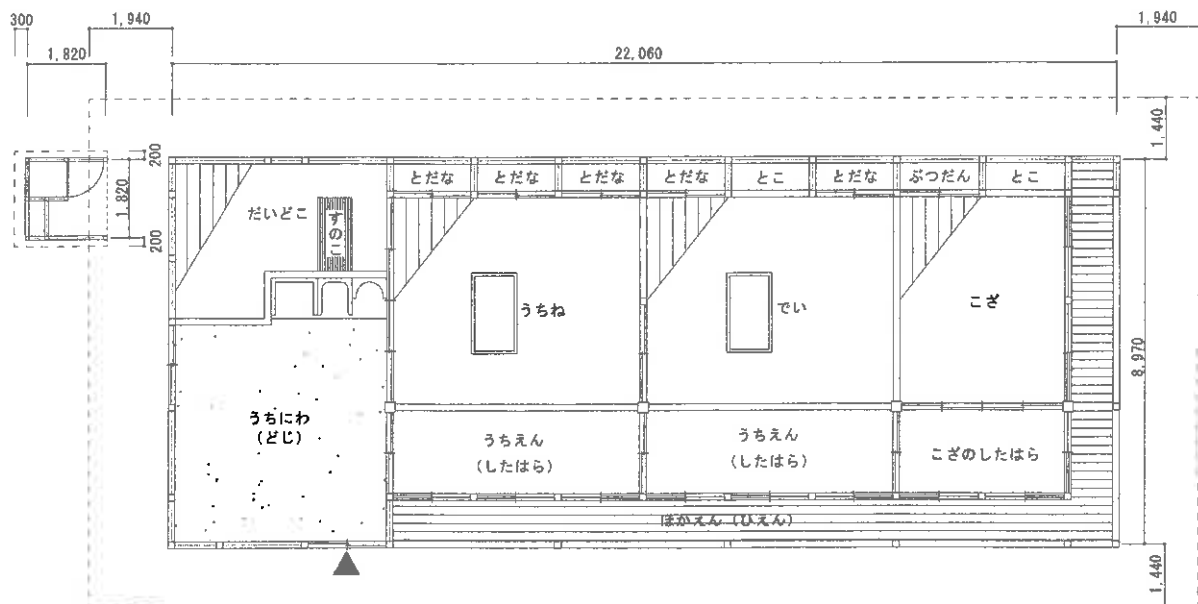


図 旧椎葉彦蔵家住宅 平面図（『民家の案内』日本民家集落博物館）



写真1 庭に立てられた依代（大河内神楽）

神楽の当日、舞台になるのがデイである。庭に神を招く大型の依代が立てられる。デイの床の間には「高天原」と呼ぶ祭壇が設けられ、その前にさまざまな供物が供えられる。デイの四隅にしめ縄が張りめぐらされ、「雲」と呼ぶ天蓋様のものがつりさげられる。この空間が神楽を舞う場となり、「御神屋」と呼ばれる。コザには囃子や神歌を歌う人が座るとともに、神職や舞手たちの控えの間になる。また村人はウチネと2つのウチエン、濡れ縁であるホカエンで見学する。デイ・ウチネとウチエンを仕切る敷居には建具を立てるための溝がなく、神楽を舞う場と観客を区別する結界の機能を果たす。溝がない敷居の存在は、椎葉家が数年に1度回ってくる神楽宿をつとめることを前提につくられていることを示している。

神楽の奉納と顕在化する秩序

椎葉神楽は出雲系の神楽で、いずれも御幣や鈴、刀などを手に取って舞う「採物舞」と、鬼などの面をつけて舞う「面の舞」が伝承されている。ここでは利根川神楽を中心に紹介する。

利根川神楽はかつて旧暦の11月17日の夕方から18日の朝にかけて舞われた夜神楽で、33演目が伝えられている。神楽宿は3戸が交代で受け持っていたが、昭和33年に氏神の境内に神楽殿を建築し、それ以来民家で行われることはなかった。

神楽に先立って、まず舞手たちが「神招きの



写真2 祭壇「高天原」（尾前神楽）



写真3 「雲」（大河内神楽）



写真4 「御神屋」（利根川神楽）

歌」で八百万の神を庭の依代に招き、さらにデイの祭壇に勧請して神酒を酌み交わす神事が行なわれる。その際に庭の依代から縁に立つ神職の手に綱が張られ、神々が綱を通して屋内に導かれる様子が演じられ、観客は神の来訪を視覚的に感じることになる。最初の演目は「有長」で、神降ろしの曲である。以下鬼面をつけた「鬼神」などが次々に奉納される。舞手の激しい動きは、神の感情を表現しているといわれる。「雲」が

激しく揺り動かされるのも同様である。神歌が唄われるのも椎葉神楽の特色である。終わりのころに演じられる「火の神」では、ダイドコの竈の前で経を唱えた後、火の神と神酒を酌み交わす。椎葉の神楽は本来夜通し行なわれるので、村人たちは銘々ご馳走を持ち寄り、食べながら見物したという。

椎葉の民家では、日常的にはドジ（土間）から出入りし、客はデイやコザに招き入れられる。



写真5 舞手と観客（尾前神楽）



写真6 舞手の激しい動き（尾前神楽）

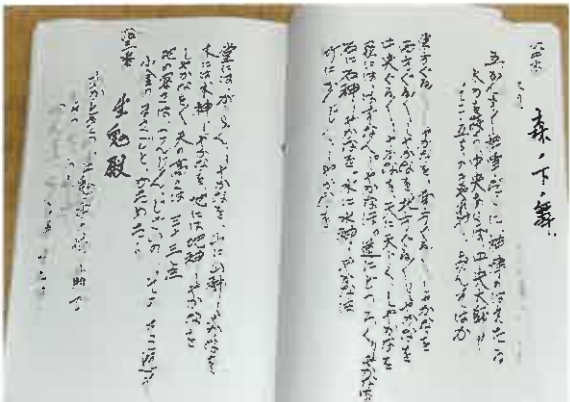


写真7 神歌（尾前神楽）

ウチネ、デイ、コザの順に部屋の序列が高くなり、客の階層や対応内容によって使い分けられる。一般的には通路の機能をもつウチエンが、当家では建具によって遮断されている。ウチエンの主たる機能が各部屋と屋外の緩衝にあるといえる。

神楽の当日、デイが最も高い格式の部屋となり、神々の動線は、庭→ホカエン→ウチエン→デイ→床の間になる。神楽は床の間の祭壇を正面にして演じられるので、舞手はウチエンやホカエンの観客に対して背を向けることになる。神楽を奉納する対象はあくまでも神なのである。そして床の間とデイが神の空間、ウチエンとホカエンが人の空間に区別されることになる。この日、神の来訪によって、ホカエンをクチとし、デイの床の間をオクとする古い秩序が顕在化する。

神と人の交流さらに再生の場の出現へ

尾前神楽では神饌としてイノシシの頭部が供えられる。演目「板起こし」は狩猟神事であり、この地域の生業の一つが狩猟であったことを伝えている。これについては、柳田國男が『後狩詞記』で当地の狩猟伝承を紹介している。神楽の合間に、山刀を使って猪の頭部から肉を切り取る儀礼が行なわれる。この肉は竹串に挿してたいまつで炙り、参加者に振舞われる。またすべての神楽で、舞手たちが観客席に入ってきて酒をすすめる。これらは神と人の共食として理解することができよう。

また演目の間に、神職が観客の間を回って頬に墨をつける所作をする。これは神が祝福した印であるとともに魔よけの意味をもつ呪術で、



写真8 猪の頭部から肉を切り取る（尾前神楽）



写真9 神の祝福の印（尾前神楽）

全国的にみられる習俗である。大河内神楽で獅子頭が観客の頭をかぶる所作をして回るのも同様の意味がある。

奥三河地方で行われる花祭りでは、神である鬼が炉の火をかき乱し、しめ縄を切ることで結界が破られる。そのあとは神と人が入り乱れて乱舞が展開される。椎葉神楽でも結界を切る儀礼が行なわれた可能性がある。神楽の祭場では、結界を切って人と神が時間と空間を共有することが重要であったといえる。それは人の世界に、神のもつ活力がもたらされることを意味した。

さて尾前神楽ではクライマックスを迎えるころ、祭壇の前で2人の舞手が弦を外した2本の弓を合わせて仮の門をつくる。これは女性器を模したもので、観客が次々にここを潜る。早川孝太郎は文献や伝承をもとにかつて花祭りにおいて「白山」と呼ばれる再生の場がつくられ、老人や病人がここを潜ることにより健康な体を取り戻す儀礼が行なわれたことを明らかにした。尾前神楽で行われる所作にも同様の観念が存在しており、すでに花祭りで失われた神楽の



写真10 女性器を模した仮の門を潜る（尾前神楽）

重要な役割が今なお伝承されていることに驚かざるを得ない。

ちなみに「白山」とは、早川によると2間ないし2間半、高さ3間ないし3間半の屋根のない方形の建物である。四方の壁はすべて青柴を束ねて葺き囲い、各々の壁に出入り口が開けてあった。また内部は約2尺の高さの床がつくられ、その下にも青柴の束が敷き並べられていたという。さらに天井に相当する部分に梵天を飾り、そこから四方に青・赤・黄・黒・白の5色の布を張り渡していた。このような白山の内部は、黄泉の世界に想定されていたと指摘している。

祭壇を設け神楽を舞うデイは多くの神々が集い、神々のエネルギーに満ちた空間と意識されている。再生への期待も、このような意識の延長線上に位置づけることができよう。2本の弓がつくる仮の門は、それを実感するための装置である。

文化遺産としての民家と神楽

椎葉神楽では、集落内の住まいの一つを祭場にして、そこに多くの神々を迎えて人と神が交流する空間を創出している。さらに儀礼の中で再生の装置を用意して病や災いを取り除く呪術も行われる。ここでは人と神が交流を通して地域が活力を取り戻していくストーリーが演劇的に展開されることになる。当屋になった住まい全体が祭場に転換される椎葉神楽は、村人にとって貴重な時間と空間を創出する機会であった。

平成3年、各集落に伝承されてきた神楽が「椎葉神楽」の名称で国の重要無形民俗文化財に指定された。日本民家集落博物館の移築民家で行なわれた公演は、無形文化遺産の椎葉神楽が有形文化遺産の椎葉の民家と半世紀ぶりに出会い、本来の姿を取り戻した瞬間でもあった。

（参考文献）

早川孝太郎全集第2巻 未来社 1972

博物館運営委員 文学部教授

「矢原繁長展—直観—」……封印を解くために

矢 原 繁 長

2015年6月3日正午、私は関西大学博物館特別展示室の中央部分の太い柱に背を持たせ掛けて一人で座り込んでいた。

作品をどのように展示構成するのかノープランである。そこに存在するのは、四国の工房から運び込んだ大量の鉄、鉛とコンクリートの作品群。そして、それらを取り囲むのは博物館の壁とショーケース。

インスタレーションは過去に制作された作品群を現在形が引き受ける行為なのである。

私の靴底が鉄の角柱に触れている。それらは未だ光を反射しながら、今にも崩れ落ちそうなほどに錆びていく。同時に、等価値のままで沈黙を続けている。

「鉄塊」

鉄塊の要求は

精錬のための化学物質の調達

膠着状態。

ぼくと後部座席の見知らぬ女は

鉄塊から水分が滲み出すことと

植物らしき生命の萌芽

を見逃さなかった

リミットは3分。

カウントダウンがはじまった

10・9・8 —— 本気？

3・2 —— 鉄塊は消失した

ぼくは清楚な水を飲み

女は植物をプランターに植えた

鉄が質量を失い続ける間、鉛は決して朽ちない。変化は表層だけで繊維のようにしなやかにすべてを吸収し、個体としての存在を堅持する。私が自分の詩集を鉛に封印するのは、読むことを拒むことで活字を永遠の最中に解き放つためである。永遠を明確に掴む者はいない。ただ永遠を直観する場所はある。

「OKINAWA」

海底が炎症を起こす午後

有刺鉄線が空を傷つける

大きな瞳の少年がボールを打つ

日焼けの少年が滑り込む

帽子の上を戦闘機が横切る

ここには特別なルールがある

ホームランボールを取り戻すには

スタンプだらけの旅券が要る

鉄柵の向こう側で見知らぬ兵士が

灰色のジープを追走する

どこかの誰かをやっつけるために

少年達の歓声があがる

夕暮れに試合は終わり勝者が生まれる

だが鉄柵の周囲に勝者はいない



勝者の代わりに恒星のような
ピカピカのバッジを手に入れよう
淡い秒針が有刺鉄線を突破する夜には
鎮痛剤を用意しておいてくれ

私は永遠を感じられる空間を作るべきなのだ。36日間だけ存在する永遠を直観する「装置」としての空間を出現させよう。「私」は過去、現在、未来にも存在しない。自我と無我を確認する行為としてのインスタレーションはこうして始まる。

「思考」

こんなに明るいライトの中でも
ぼくはぼくに入れないでいる
思考はぼくの周りをうろつくだけで
ぼくはぼくの心臓の鼓動を聴けないでいる
ぼくはマイクを持てばしゃべりだす
ぼくではないぼくの言葉でしゃべりだす
教室の笑い声といっしょに
ぼくはぼくを笑い続ける
コツンと落ちたボールペン
といっしょに転がり続ける
こんなに明るいライトはぼくがもとめて
きたものだから 通路を通るワゴン
のように人格を販売する
こんなに暗い帰り道に隠れても
ぼくはぼくの薄皮に弾き出される
細くて長い高架下をうろつく
こげ茶色の犬と眼が合って ぼくは
ぼくに潜りこみぼくの思考を嗅いでみる



午後4時。鉛板をショーケースに載せ1本の
赤い糸を張る。物理的にはインスタレーション
は始まったばかりなのだが。私は「完成」を確
信し、それは過去形に納められる。

私は何かに向かって車を走らせる。



「壁」

深夜のビジネスホテル
1110号室の窓
今日の記憶が僅かに留まって
雨の雫が膨らむ
転がる
破れる
信号が路上で点滅する
明日は無表情な腕組みのまま
砕かれた岩塩のように
散らかる
固まる
駅裏のビジネスホテル
1110号室の壁



この企画展にご協力くださった長谷洋一博物館館長をはじめとする諸先生方、学芸員のみなさまに謝意を表したい。

現代美術家・詩人

「平野町ぐるみ博物館」について

青 木 真 兵・古 川 桂

2015年現在、私たち（青木と古川）は大阪観光大学にて博物館学芸員課程の授業を複数担当している。このたび、その授業内における「学外授業」として「平野町ぐるみ博物館」を訪れたことを報告する（2014年11月23日実施）。博物館情報・メディア論、博物館展示論、博物館資料論の受講者、約40名が参加した。

大阪府大阪市平野区の中心に位置する「平野町ぐるみ博物館」は一般的な博物館と異なり、「町全体を博物館にしようという運動」である。名称の由来は公式ホームページによると、「故西山卯三（にしやまうぞう、1911-1994）氏が文化財に恵まれた平野を『町そのものが博物館』と評したこと」に因んでいるという。確かに、四方が約1 kmと小さいこの地域は非常に高い歴史的価値を有している。

平野は戦国時代に環濠自治集落として発展し、現在にも残る江戸初期の町割りや幕末や明治の建物を含む古い町並みは、当時の人々の生活を感じさせるものがある。また藩校や私塾とは異なり同志たちが定期的に資金を積み立て利息によって運営された郷学、^{がんすいどう}含翠堂が建てられたことも知られている。そして含翠堂は懷徳堂の先駆けとされていることから、当時は経済的にも豊かな文化的先進地域であったということがわかるだろう。

「平野町ぐるみ博物館」へは JR 大和路線平野駅、地下鉄谷町線平野駅の双方から徒歩12分で行くことができる。この日の集合は9:20に

^{せんこうじ}全興寺の境内。全興寺は聖徳太子によって建立された薬師堂がその起源で、ここから町が形成されたと伝えられている。本授業ではまず住職にお話を伺い、その後を自由行動とした。以下ではその住職のお話を中心にまとめていこう。

「平野町ぐるみ博物館」の中心は、1993年に発足した平野町づくりを考える会である。南海電鉄平野線が廃線になった際、駅舎の保存を求めた住民運動から派生した「考える会」は、外から人を呼ぶために商業施設を建設するのではなく、地域に住んでいる人たちに町を見直してもらうための町づくりを標榜しているという。結果的に古い町並みを残したことで、口コミで広がり外から人が見学にやってくるようになった。また行政によるいわゆる「上からの町づくり」ではなく、地元住民が自ら立ち上がり「町づくり」を進めたことは、かつて自治集落として発展した平野の人々の気概を感じさせる。公式ホームページの以下の文章はこの想いを語っている。

「考える会」にはその組織と活動理念に関してユニークな特徴があります。組織については、



写真1 全興寺入口



写真2 駄菓子屋さん博物館

「会長なし・会則なし・会費なし」の三原則を掲げ、様々な背景を有する人々が個人の資格で緩やかに連帯する、というネットワーク型の形態を維持している点に特徴があります。また活動理念については、「おもしろいことをいい加減にやる」をモットーに、自分たちが本当に興味を持って取り組めるテーマを厳選し、ひとりひとりが持続可能なエネルギー配分で取り組めるようお互いが心掛ける、という点にも特徴があります。行政とも常に一定の距離を保ち、住民主体のまちづくりにこだわり続ける「考える会」の姿勢には、まちづくりに対する明確な目的意識があります。時間はかかるかもしれないが、ひとりひとりが本当に自分の気持ちから町づくりに参加し続けられるような下地を育んでいこう、というのがこの会の活動の核心的な部分です。いわゆる経済効果をねらった「まちおこし」とはある意味で対極な位置にあると言えます。しかしながら、この会の中で育まれた地域を核とした人間のつながりは、しばしば「まちおこし」的な活動を成功させ、結果的に地域活性化を果たすことになっている点は、外から見ても中から見ても痛快そのものです。

このような考えのもとに誕生した「平野町ぐるみ博物館」には、いわゆるパンフレットやガイドブックは存在しない。「町全体が博物館」なのであるから町のなかを歩いてもらうことが肝要で、迷いながら路地をみてもらうために詳しい案内は必要ないという。住職は「もし迷ったら地元の人にどんどん聞いて下さい。そうすることで聞かれた方は地域のことに関心を持ち、みんながガイドになっていくのです。」とおっしゃられていた。

「平野町ぐるみ博物館」は2015年9月現在、15館が常設展として運営されている。例えば、全興寺の境内にある「小さな駄菓子屋さん博物館」には、六畳ほどの空間に昭和二十年代から三十年代に駄菓子屋に並んでいたおもちゃをはじめ、木製の冷蔵庫、白黒のテレビ、手絞りの洗濯機など、戦後の日常を彩った家電製品が展示されている。また平野の町の懐かしい音、年間行事、昔話などの音が録音されている「平野の音博物館」では、さまざまな音を聴くことができるし、「かたなの博物館」では、刀剣に関



写真3 全興寺入口に立つ看板

連する道具類の展示だけでなく、刀剣研ぎの仕様の様子も見学することができる。

今回引率したのは観光大学の学生であり、彼ら彼女らはいわゆる「観光」を前提に考えていたことだろう。「観光」とこの「平野町ぐるみ博物館」の大きく違う点は、最終的な目的が「外」ではなく「内」に向いているところである。言いかえれば、町という博物館を舞台に訪問者と地域住民の間に生まれるコミュニケーションによって、住民が地域を再発見することに要点が置かれているのだ。これを住職は地域を肌で感じとり、人とのつながりを大事にする「感風」と呼び、外へとばかり目が向いている「観光」と区別している。

学生たちは日本人だけでなく、中国人、ベトナム人、タイ人であり、各国各地域にはさまざまな歴史・文化があるはずである。特に留学生は、ぜひこの授業で学んだ「感風」を母国に持ち帰り、行政に頼り切らず、また他からの資本投下をあてにしない「町づくり」に活用して欲しいと強く感じた次第である。

かんさい・大学ミュージアムネットワーク連携展 「大学の扉を開く」

石 立 弥生子

平成25年度、文化庁が募集する地域と共働した美術館・歴史博物館創造活動支援事業として、大阪府と奈良県にある11の大学博物館・資料館が集まり「かんさい・大学ミュージアムネットワーク」を立ち上げました。今では、兵庫県と滋賀県、和歌山県の大学博物館・資料館が加わって16大学17館で構成する組織となり、協働して連携事業を展開しています。

1年目となる平成25年度から、「大学の扉を開く」をキャッチコピーにして、特色ある講座の開催や、学生の力を活かした展示会など、相互に資する活動を展開する一方で、大学ミュージアムとしての連携の在り方を模索してきました。

2年目の平成26年度は、学生だけでなく地域に広く、個々の大学ミュージアムを知ってもらうため、バスツアーとスタンプラリーを実施しました。ネットワークとして、事業やイベントを共同で開催する以外に、個々のミュージアムの独自性を活かして、それぞれの館へ足を運んでもらう企画も並行することが、連携を長く続けていく連帯感につながるのではないかと考えています。

また、相互の理解を深めるためにほぼ毎月打ち合わせ会を重ねました。その議題のメインとなったものは、3年目の活動の目玉となる連携展に向けた準備でした。まずは、関西大学が平

成28年度に創立130周年を迎えるプレ企画として、4月にネットワーク連携展を開催することで予算を確保し、準備に取り組みました。そして、文化庁の補助金の採択がおりてから、巡回展を開催することになりました。



関西大学博物館展示風景

巡回展の会場としては、大阪大谷大学博物館が手をあげてくれました。関西圏で同じ内容の展示会を時期をたがえずに開催することの問題はありましたが、相互の研修もかねての実施です。実際、自館の所蔵資料のみで展示会を組み立てている本館にとっては、借用の手順や普段扱わない形状の資料の展示手法を教わるなど、学ぶことの多い展示会となりました。

展示テーマは、「いにしえ」「王朝文化」「文学」「大大阪」「まなび」「エンターテインメント」「文化的建築」といった、初年度に相互に出し合った連携キーワードを柱に、全体として「大学の扉を開く」としました。

連携展では、準備の段階から、ネットワークの持つ課題が浮かび上がってきました。そもそも連携館17館すべての足並みが揃っているわけではありません。どこも限られた構成員と予算のなかで、工夫を重ねて特色ある展示活動を展開しています。全館が揃って立ち会いのもと準備する時間は取れませんでした。できることから、できるもので、展示を進めていきまし



関西大学博物館特別展示室入り口

た。また、少しの時間を見つけて寄り合うことで、一層の連帯感が募り、相互にライバルではありますが、ちょっとした言葉がアイディアの源であったり、悩みを共有できたりと、人的交流を図ることができました。



大阪大谷大学博物館展示風景

展示以外にも、関連企画として、大阪商工会議所興津厚志氏の大大阪の時代をテーマにした講演会や大阪芸術大学博物館の柳知明氏と本学社会学部の小川博司教授の蓄音機と音楽の複製にまつわる演奏会、大阪青山歴史文学博物館の所蔵品についての小倉嘉夫氏の講演会を行いました。連携展のテーマのとおり、大学の扉を開いてみれば様々な企画の宝庫であることがわかります。また、実際に展示された資料を媒介に、それぞれの所蔵資料と組み合わせ、こんな展示会ができるかもといった次への構想にもつながりました。各大学が所蔵する文化資源を有効に活用し、相互に連携させることで、一つの館だけでは成し得ない広がりを持った展覧会になったと考えています。さらには、今後の展開に向けての種（タネ）も蒔かれたのではないのでしょうか。

さて、本館での連携展が終了して、夏季企画展の会期中のことです。男子学生2名が、来館者の立ち入りを想定していないバックヤードともいえる展示ケース裏に入り込み、たまたま居合わせた本館館長に大目玉をくらうという事件がありました。よくよく話を聞いてみれば、両方とも新入生で、その日、偶然に食堂で隣り合わせたばかり。一人の学生が入学早々に見た「大学の扉を開く」展で、本館の扉が気に入って、新しくできた友人にぜひとも見せたいと再度来館

したとのこと。残念ながら、夏季企画展では展示室のレイアウトが変わってしまって、彼が見たかった扉は隠れており、それを捜すために展示ケース裏にまわってしまったようです。今となっては笑い話ですが、そのときは驚き、総勢で展示室の再点検にあたりました。

さて、彼は「扉」にどんな思いを託していたのでしょうか。少し空回りの熱意ではありましたが、連携展のタイトルと彼の未来への扉の両方が連想され、余波が心に残りました。

彼らが、そしてこの展示会を大阪大谷大学博物館と本館でご覧下さったかたがたが、今後、大学の扉を積極的に開いてくれることを期待いたします。

平成27年度も、引き続きネットワーク活動として、スタンプラリーやバスツアー、その他各館主催の行事を実施します。扉の向こうには、どのような世界が広がっているのでしょうか。みなさまご自身の目で、身体で、感じ取っていただきたいと思います。

かんさい・大学ミュージアムネットワーク連携展「大学の扉を開く」は、平成27年4月1日から5月17日まで関西大学博物館特別展示室で、7月1日から31日まで大阪大谷大学博物館で開催しました。総展示件数は137件。のべ開館日数65日、期間中の来館者数は3,573人でした。

ご協力いただきました関係各位に深く感謝申し上げます。



博物館事務長 学芸員

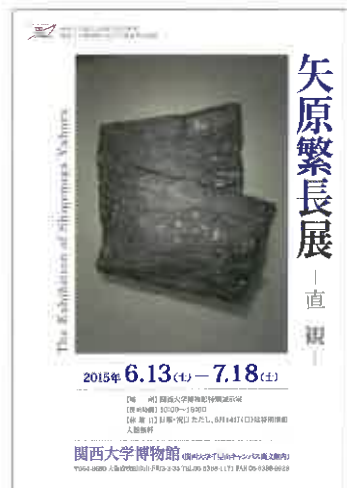
◆ 博物館だより

◇平成26年度関西大学博物館 開館日数・入館者数

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
開館日数	26	26	26	26	4	7	26	22	21	22	17	17	240
入館者数	1,827	5,055	2,775	1,940	3,635	78	432	902	1,698	2,855	132	666	21,995

◇ 平成25年度に立ち上げられた「かんさい・大学ミュージアムネットワーク」の新たな取り組みとして各大学博物館・資料館が持つ優品、名品を展示した連携展「大学の扉を開く」を4月1日から5月17日まで開催し、2,958名の方にご来場いただきました。なお、この連携展は、平成28年11月に迎える関西大学創立130周年記念事業の一環としても位置づけられています。関連催事として、4月24日に講演会「あれも大阪、これも大阪～栄養菓子グリコ、日本初ウイスキー、世界初ターミナル百貨店etc.～」(講師：大阪商工会議所次長 興津厚志氏)、5月14日に講演会と蓄音機によるレコード演奏「ポピュラー音楽の誕生と蓄音機～音楽複製への欲望をめぐって～」(講師：大阪芸術大学博物館事務室事務長 柳知明氏・本学社会学部教授 小川博司氏)が開催されました。

◇ 夏季企画展として本学校友であり、現代美術家で詩人である矢原繁長氏の「矢原繁長展 一直観」を6月13日から7月18日まで開催しました。この企画展の来場者は、1,245名でした。期間中の6月20日に矢原氏による講演会「物質：理性と感性の距離」が開催されました。



◇ 昨年度に引き続き博物館実習実践研修会を開催しました。藤枝宏治氏による表装研修(6月22日)、河内國平氏・河内晋平氏による日本刀研修(6月27日)、佃一輝氏・佃梓央氏による煎茶研修(7月9日)に、あわせて115名の参加者を数えました。



◇ 「博物館キッズミュージアム」を7月23日と8月4日・5日に実施しました。今年は、本学カイザーズクラブの参加もあり、3日間で1,867名の皆さんに賑やかに楽しんでいただきました。

◇ 本年度上半期に大門 博氏から枚方市九頭神廃寺から出土した飛鳥白鳳期の軒丸瓦破片1点、刀匠河内國平氏から日本刀関連書籍30点さらに矢原繁長氏から作品「法典崩壊」1点の寄贈がありました。今後、博物館で充分活用していきたいと考えています。

．．． 編集後記 ．．．

表紙は、三彩刻花芍薬文双耳壺です。線彫りして芍薬文をあらわした三彩の双耳壺で、遼三彩にしばしばみられる技法と器形です。簡略化された大雑把な芍薬文の線描といい、緑と黄のたがいに流れこむ釉薬といい、遼三彩(遼時代の三彩釉の総称)の特有の素朴な作風を示しています。

平成27年4月から藪田 貫本学名誉教授の後任として、長谷洋一文学部教授が博物館長に就任いたしました。前館長同様、ご指導・ご支援を賜りますよう、よろしくお願いいたします。

